



安吾つて!?

Part 6

2024. 1月 4日 木

2024. 3月 24日 日

能登半島地震の影響により、耐震を考慮し1月4日
のみ開館し、以降 臨時休館

旧市長公舎

安吾 風の館

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町 5927 番地 9

開館日数 1日 入館者数 13名

安吾ゆかりの地めぐり

3月9日(土) 参加者 4名

旧市長公舎 安吾 風の館 展覧会案内

展覧会名	安吾って!? Part6
会 期	2024年1月4日(木)～3月24日(日)
主 催	公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 新潟市
会 場	旧市長公舎 安吾 風の館 展示室 新潟市中央区西大畑町 5927-9 Tel&Fax 025-222-3062
休 館 日	毎週月・火曜日 祝日または振替休日にあたる場合はその翌開館日
入 館 料	無料

【展覧会概要】

「安吾って!？」とは、はじめて安吾にふれる人に向けて、安吾に関する疑問と驚きを紹介する展覧会です。

安吾着用のオーバーコート、愛用のステッキ、旅行鞆や手袋。安吾の蔵書や初版本、2000年以降出版された安吾作品や関連書籍、自筆原稿、文房などの展示、本名“炳五”とペンネーム“安吾”の由来なども紹介しています。

Part6として、安吾の友人や身近にいた人の思い出や、「風博士」「墮落論」等安吾作品の同時代評価をパネルで紹介します。

◇おもな展示予定作品

■坂口安吾 遺愛の品

坂口安吾専用原稿用紙、白磁書鎮、万年筆、鉛筆、オーバーコート、ステッキ、旅行鞆、手袋

■自筆原稿(未定稿) 「田舎のメインストリート」、「工員ゴルフ」

■坂口安吾の著作(初版本)

『日本文化私観』 文體社 1943年

『墮落論』 銀座出版社 1947年 『白痴』 中央公論社 1947年

『吹雪物語』 新體社 1947年

『信長』 筑摩書房 1953年 他

■安吾の思い出、同時代評

■写真

兄・献吉と、豊山中学卒業アルバムから、西都原遺跡にて、桐生の自宅にて 他

■坂口家の系譜

出品点数 50余点

【和室 坂口綱男写真展示】

「安吾のいる風景」 Photo/Essay

1982年4月～7月、1996年7月～10月 『新潟日報』(計30回)、

1996年6月～8月 『桐生タイムス』(計10回)より、10作品を展示

安吾って!? Part 6 出品目録

2024 (令和6) 年 1月 4日 [木] - 3月 24日 [日]

No.	種類	作者名	作品名	年	出版社	備考	
1	文房具		坂口安吾専用原稿用紙				
2			パーカー 万年筆/シャープペンシル				
3			パイロット 万年筆(國光会製)			三千代から贈られた蒔絵万年筆	
4			鉛筆 トンボ8900			2B 筆入れ、消しゴム	
5			白磁書鎮			南川潤氏より贈られた書鎮	
6			卓上オイルライター				
7	愛用品		オーバーコート				
8			マフラー				
9			ステッキ(木製)			長さ: 87.5cm	
10			旅行鞆(茶皮革)			長さ: 48.0cm	
11			茶 革手袋				
12	自筆原稿	坂口 安吾	田舎のメインストリート	1954年		未定稿 ペン書き (複製)	
13		坂口 安吾	工員ゴルフ	1954年		未定稿 ペン書き (複製)	
14	評論	頼尊 清隆	闇の中の安吾さん	1968年	冬樹社	『定本坂口安吾全集』月報3	
15		江口 清	在りし日の安吾	1968年	冬樹社	『定本坂口安吾全集』月報4	
16		檀 一雄	作家論(坂口安吾論)	1969年	冬樹社	『定本坂口安吾全集』第7巻	
17	初版本等	坂口 安吾	日本文化私観	1943年	文體社		
18		坂口 安吾	二流の人	1947年	九州書房		
19		坂口 安吾	白痴	1947年	中央公論社		
20		坂口 安吾	いつこへ	1947年	真光社		
21		坂口 安吾	逃げたい心	1947年	銀座出版社		
22		坂口 安吾	いのちがけ	1947年	春陽堂		
23		坂口 安吾	吹雪物語	1947年	新體社		
24		坂口 安吾	欲望について	1947年	白桃書房		
25		坂口 安吾	シロリの女	1948年	秋田書店		
26		坂口 安吾	墮落論	1949年	銀座出版社		
27		坂口 安吾	安吾巷談	1950年	文藝春秋新社		
28		坂口 安吾	信長	1953年	筑摩書房		
29		坂口 安吾	わが人生観	1955年	筑摩書房		
30		坂口 安吾	保久呂天皇	1955年	大日本雄弁会 講談社		
31		坂口 安吾	真書太閤記	1955年	河出書房		
32		坂口 安吾	安吾史譚	1955年	春歩堂		
33		坂口 安吾	金銭無情	1956年	東方社		
34		最近の 書籍	坂口 安吾	墮落論	2000年	新潮社	新潮文庫
35			坂口 安吾	戦後短編小説再発見	2001年	講談社	「戦争と一人の女」無修正版収録
36			坂口 安吾	墮落論・日本文化私観 他	2008年	岩波書店	岩波文庫
37			坂口 安吾	桜の森の満開の下・白痴 他	2008年	同	同
38	坂口 安吾		墮落論・特攻隊に捧ぐ	2013年	実業之日本社	無頼派作家の夜	
39	近藤ようこ		漫画「戦争と一人の女」	2014年	青林工藝社		
40	近藤ようこ		漫画 桜の森の満開の下	2017年	岩波書店	岩波現代文庫	
41	近藤ようこ		漫画 夜長姫と耳男	2017年	同	同	
42	七北 数人編		狂人遺書 他	2018年	春陽堂書店	歴史小説コレクション	
43	七北 数人編		女剣士	2019年	同	エンタメ 伝奇篇	
44	七北 数人編		盗まれた手紙の話 他	2019年	同	同 ファルス篇	
45	七北 数人編		現代忍術傳	2019年	同	同 ハードボイルド篇	
46	浅子逸男 他著		坂口安吾 残酷な遊戯・花妖	2021年	同	新発見未定稿収録	
47	安藤宏 他編		坂口安吾大事典	2022年	勉誠出版	安吾研究実績と課題	
48	パネル			坂口家系譜	/		
49		坂口安吾評・思い出		/			
50	写真		兄献吉と	1917年		安吾11歳、献吉22歳	
51			豊山中学校・卒業アルバムから	1925年			
52			檀一雄と 川中島への旅	1953年		春日山から信州への旅	
53			桐生 親子三人	1954年			
54			西都原遺跡にて	1955年		宮崎県への旅	

【和室 写真展示】

坂口綱男 「安吾のいる風景」 Photo / Essay



立ちケース



愛用の文房具

名前入り専用原稿用紙（坂口安吾専用原稿用紙）

満寿屋製 セピア罫 ルビ罫なし

パーカー万年筆 パーカー51

米軍戦闘機 P-51 をイメージした流線型のフォルム

パーカーシャープペンシル

蒔絵万年筆（パイロット） 「國光会 博（花押）」

國光會＝1926（大正15）年招聘された人間国宝・故松田権六により、31年パイロット社内外の作家80余名で組織した蒔絵集団。

会は今も受継がれ、各作家が蒔絵を施し、作品には銘が記されている。

博：笹田博 妻三千代より贈られた、蒔絵宝相華文の万年筆

鉛筆 「トンボ 8900」

安吾が好んだトンボ2B鉛筆。妻三千代は、毎日削ってそろえていた

白砥雨龍文書鎮 南川潤氏より贈られた文鎮

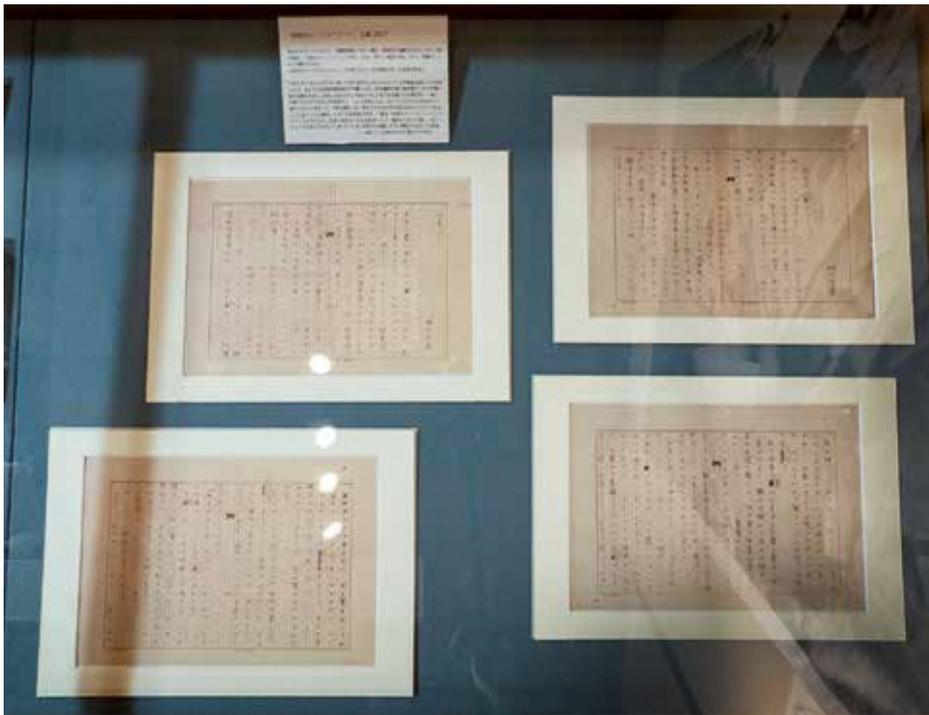
雨龍：好運を招く想像上の生き物、角がなく尾が細い

白砥：白色の貴石

卓上オイルライター

良いライターの条件は「風の中でも火がつくこと、必ず一度で火がつくこと、油の持ちが長いこと」（「安吾行状日記」1952年）であるという。

この卓上ライターは、安吾がいつもポケットに入れて持ち歩いていた



自筆原稿（未定稿）

「田舎のメインストリート」

「工員ゴルフ」

桐生通信 1954年3/11～12/6 『讀賣新聞』連載

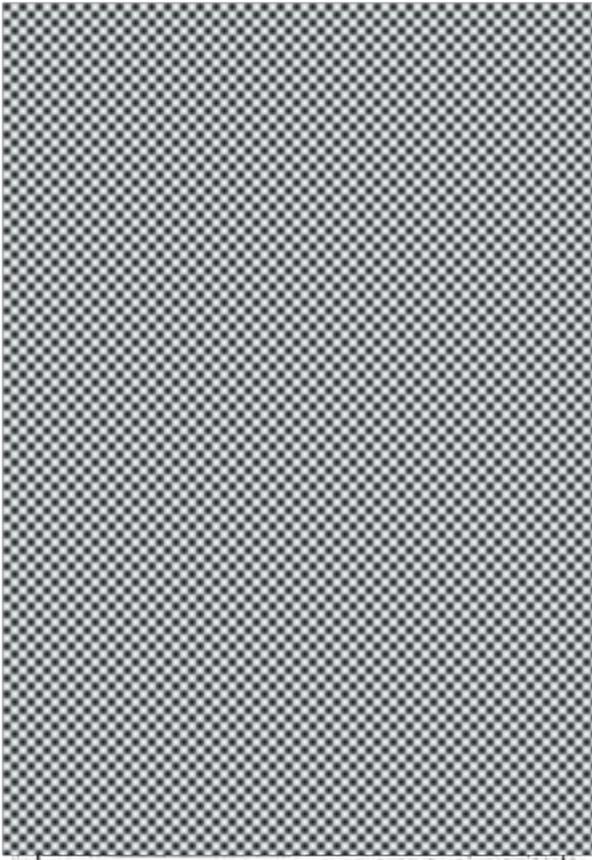
「桐生通信」は、8回に渡って断続的に連載された。

「田舎のメインストリート」は第1回3/11に、「工員ゴルフ」は、同じく『讀賣新聞』の依頼で、4月頃執筆されたが、掲載されなかった原稿。

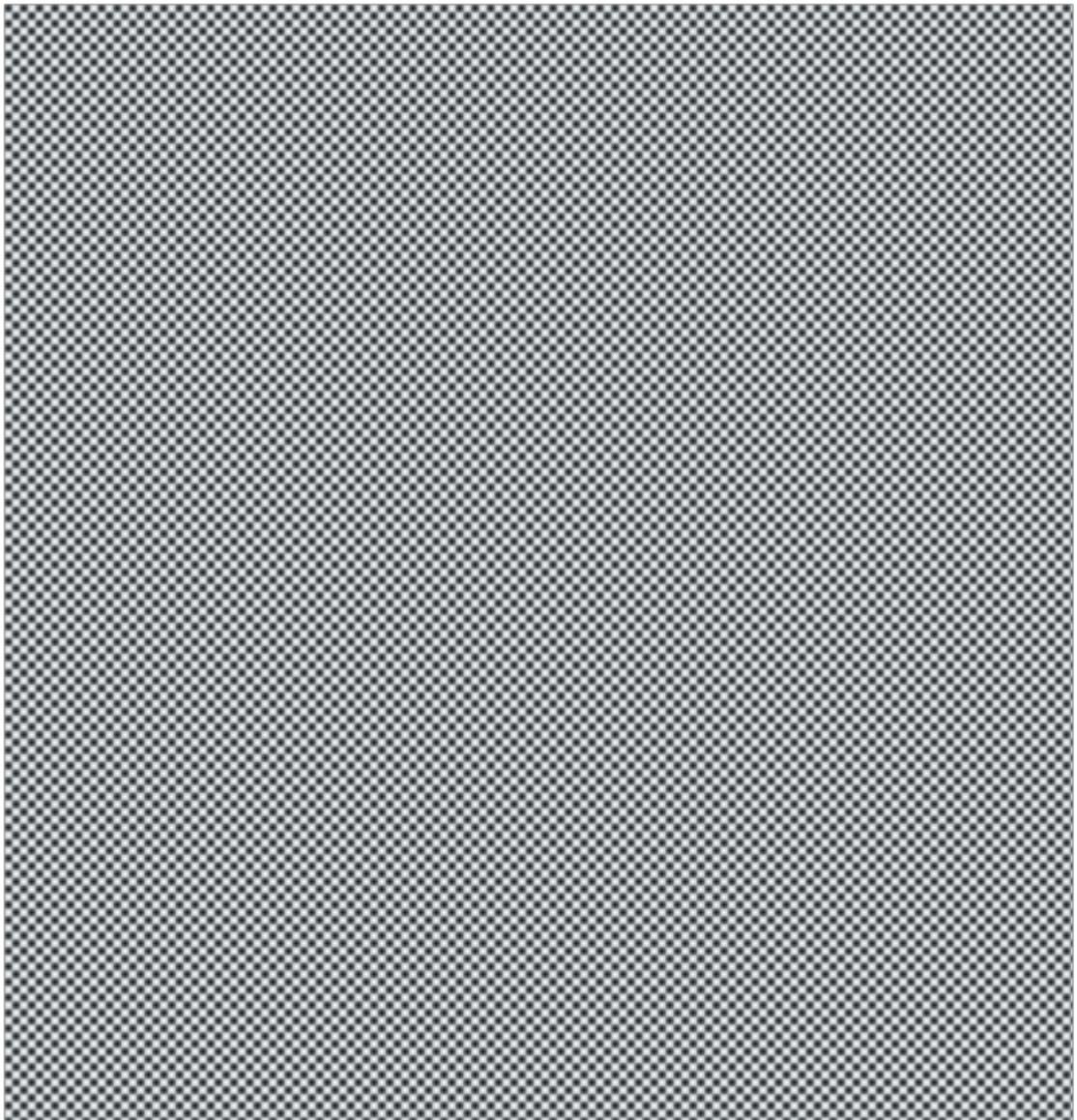
残っている原稿では、タイトルが「田舎のメインストリート」となっており、著者名も記されているが、定稿とは書き出しから違っており、両方を読み比べてほしい。

「工員ゴルフ」は、タイトル、著者名が記されている。「桐生通信」の中では、「スコア屋でないゴルフ」（11/8）に、工員ゴルフのことが書かれている。

いずれも発表されなかった未定稿ではあるが、定稿と比べてみると、作者の制作過程に触れることができ、興味深い。



新潟新聞 1935年6月28日付



風博士・黒谷村

「風博士」は、1931年同人誌『青い馬』第2号に、「黒谷村」は、同3号に掲載された。1935年、「木枯の酒倉から」など初期の短編を集めた、安吾初めての単行本『黒谷村』にいずれも収録されている。

「風博士」は、牧野信一が『文藝春秋』1931年7月号の別冊ユウモアのなかでとりあげ賞賛した。「私は、ファウスタスの演説でも傍聴しているみたいな面白さを覚えました。」

「この作者は今後も吃度愉快な一わかりにくい作品を発表して屢々私に首をかしげさせるだろうと思いました」という牧野の一文によって、「風博士」は読者の目にとまった。また「黒谷村」は、同じく牧野が8月23日付『時事新報』で絶賛した。牧野信一が採りあげたことが、安吾文壇デビューのきっかけとなったといわれている。

安吾自伝的小説『二十七歳』に「風博士」のことを次のように書いている。

“散文のファルスで、私はポオの X'ing Paragraph とか Bon Bon などという馬鹿バナシを愛読していたから、俺も一つ書いてやろうと思ったまでの話で、こういう馬鹿バナシはボードレールの訳した仏訳の中にも除外されているほどだから、まして一般に通用するはずはない。（中略）ボードレールの鑑賞眼をひそかに皮肉る快で満足していた。それは当時の私の文学精神で、私はみづから落伍者の文学を信じていたのだった。”

牧野 信一 まきの・しんいち 1896 明治29年 - 1936 昭和11年 40歳

神奈川県小田原市生まれ。1919年早稲田大学英文科卒業。下村千秋、浅原六朗らと『十三人』を創刊し、「爪」を発表。島崎藤村に賞賛され、私小説作家として文壇デビュー。23年宇野浩二、葛西善蔵、久保田万太郎らを知る。24年処女作品集『父を売る子』を刊行。27年神経衰弱の傾向が強くなり、妻子とともに小田原へ帰る。この頃より、古代ギリシャや中世ヨーロッパの古典に題材をとった浪漫的幻想小説に転じ、「ギリシャ牧野」と称された。30年上京して、『作品』創作の準備に加わり、同人の井伏鱒二、河上徹太郎、小林秀雄らとの交友がはじまる。9月、大森に居を構える。

31年7月『文藝春秋』付録冊子で、安吾の「風博士」を激賞、8月『時事新報』で「黒谷村」を評価して安吾の文壇デビューを強く推した。安吾を大森の自宅に招き、交友が始まる。10月小林秀雄、河上徹太郎、井伏鱒二、坪田譲治、三好達治、青山二郎らと『文科』を創刊。安吾にも「竹藪の家」連載の場が与えられた。

33年神経衰弱が悪化、34年小田原に帰郷。初夏に安吾が訪れ、しばらく滞在、昆虫採集に出かけたりした。12月「鬼涙村」発表。36年小田原で縊死。安吾は葬儀で受付をつめる。追悼文「牧野さんの死」「牧野さんの祭典によせて」を発表。38年「牧野信一へ」という副題の「南風譜」を、戦後牧野をモデルにした「オモチャ箱」を発表。

墮落論

1946(昭和21)年4月1日発行の『新潮』第43巻第4号に発表された。安吾40歳。

「続墮落論」《『文学季刊』第2号(冬季号)実業之日本社1946年12月。発表時は「墮落論」であった》を含めて、単行本『墮落論』(銀座出版社1947年6月)として刊行された。

『新潮』の編集後記に、「青野、坂口、三好三氏の諸説を再読三読して頂きたい。敗戦以来、誰がこのように率直に胸中を披瀝されたであろうか。これらの文章はその思想の高さと深さから云っても、総合雑誌のいかめしい巻頭論文に断じて劣るものではないと信じている」と謳っている。

日本人が初めて体験した8月15日の敗戦は、天皇制を含めて一切の権力、価値の崩壊をもたらした。戦争未亡人、特攻隊、闇屋など人倫の腐敗が取りざたされる当時において、「墮落論」は多くの人々の心を捉えた。

1951(昭和26)年12月1日発行『新潮』に発表された「風流」に、当時を回想して、
一 私は日本が戦争に負けるまで、自分がこれほど日本を愛しているということを知らなかった。国やぶれて山河あり、とはまさしく私の感慨でもあったが、八月十五日に敗戦を確認したとき、それが四年前の十二月八日の日から確信していた当然の帰結であったにも拘わらず、「日本が本当によい国になるのは、これからだ」という溢れたつ希望と共に、祖国に寄せる思いもよらなかった哀情がこみあげてきて、こまった。もとよりそのような哀情がこみあげてきたところで、私にどうする当てがあるわけでもない。

ただ、私があるところ信じたことができたのは、当分の年月、餓鬼と絶望と 無法と混乱の暗黒時代がうちつづくにしても、この惨たんたる焼土から「自然に」新しい芽が生れないはずはないということだった。(中略)「むしろ、混乱の暗黒時代が長いほど、正しい位置に近づくであろう」私はそう信じ、そう書いた。一

と、書かれている。「墮落論」は、新日本建設のために書かれたのである。

安吾の兄献吉に「戦後新聞はどうあるべきか」と相談された際、書き送った手紙の中で今後予想される「混乱を回避して新日本の建設の有り得ぬ」「あの戦争が勝つ筈がないのは十二月八日以来から分りきったことで、問題は如何に戦争するかではなく、如何に敗戦から立上るか、でありました。そうして、私の思うところでは、日本が真に偉大な国家となるには、どうしてもこうして負けねばならなかった。そうして欠点を直して行かねばならなかったのだ、と信ずるのです。」(1945年9月5日付献吉宛書簡)とあり、終戦直後というより実は既に「日本文化私観」1942(昭和17)年『現代文学』2月号にその原型があるのだ。

「墮落論」について各氏の評

奥野健男（文芸評論家）

それはまさに革命的な言葉であった。敗戦の虚脱と昏迷の中にいた人々は、こういう考え方、生き方もあったのかと、目からうつぶりがとれた解放感を味わったのだ。（略）当時の日本の青年にとって、このくらい、時に適った切実な言葉はなかった。歴史を訪ねても、このように時代とぴったりと重なりあった発言は少ないであろう。まさに時代の発言であり、予言者、教祖の言葉であった。

（『坂口安吾』1972 文藝春秋刊→1996 文春文庫）

尾崎秀樹（おざき・ほつき 文芸評論家）

私は引き揚げ後しばらく農家の仕事を手伝いながら、生きるために闇の運び屋をやっていた。（略）そんなときに坂口安吾の「墮落論」は、自分を納得させる唯一のバイブルでもあった。（略）生きよ、墮ちよというそのよびかけにひかれて、私は戦後の混沌期を、青春の日々を生きることができた。

（世田谷文学館『坂口安吾展』図録 1996）

瀬戸内晴美（瀬戸内寂聴 天台宗の尼僧・小説家）

もうこれからは、自分の手で掴み、自分の目でたしかめ、自分の膚で感じとったものでなければ信じまいと思っていた時、墮落論にめぐりあい、目の前の幕が切って落されたような爽やかな感じになった。私は家を出、一人になり、全く新しい生を生きはじめた。

（「安吾の碑」『定本坂口安吾全集』第3巻月報 冬樹社 1968）

尾崎士郎（小説家）

彼が身をもって体験し究明したものは孤独な日本人の姿である。「墮落論」一巻は彼の生活哲学であり、同時に文明批評でもあった。（「坂口安吾の死」『朝日新聞』1955. 2. 18→『坂口安吾研究』I 冬樹社 1972）

河上徹太郎（文芸評論家）

彼はこれが熟するまでに長い放浪の時代を経ており、しかもこの放浪によって、並々ならぬ精神的修業を積んでいる。それだから彼の覚悟は不動であり、その文章には不屈の断定があって、余人の模倣を許さないのである。（「安吾巷談」のスタイル『文學界』1951. 3→『文芸読本 坂口安吾』河出書房新社 1978）

佐々木幹郎（詩人）

もし詩人の手によってこれが書かれていたら、日本の戦後詩も別の運命をたどっただろう。

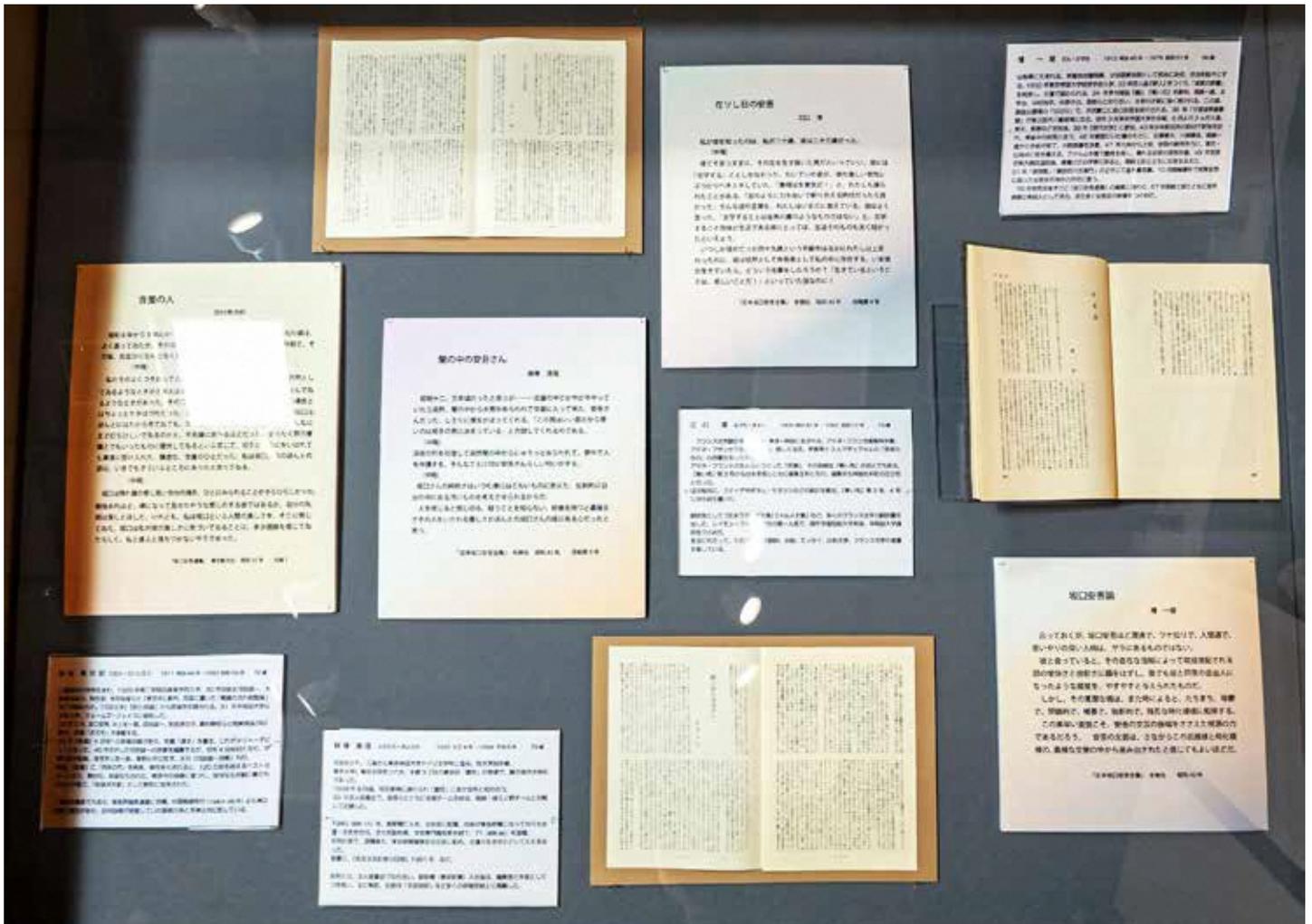
（世田谷文学館『坂口安吾展』図録 1996）

小池真理子（小説家・エッセイスト）

生きて行くことと、墮ちていくこととの間に横たわる、ひりひりとした何かを安吾はあの、ラディカルな、リズムカルな文章の中にきわめて観念的に凝縮させる。その麻薬のような文体に、私はどれほど惹かれたことだろう。（筑摩書房『坂口安吾全集』第2巻月報 1999）

町田康（小説家・詩人・ミュージシャン）

破滅か墮落することを一回引き受ける決意をするっていうことが、僕はパンクだと思うし、坂口安吾の作品にはそれがある。（町田康 × 坂口綱男 特別対談『安吾マガジン』2007）



含羞の人 田村泰次郎
『坂口安吾選集』 東京創元社 1956（昭和31）年 月報1

坂口安吾論 檀 一雄
『定本坂口安吾全集』 冬樹社 1967（昭和42）年

闇の中の安吾さん 頼尊 清隆
『定本坂口安吾全集』 冬樹社 1968（昭和43）年 月報第3号

在りし日の安吾 江口 清
『定本坂口安吾全集』 冬樹社 1968（昭和43）年 月報第4号



戦時中の坂口 大井 廣介
『文學界』 1955（昭和30）年4月号
（第9巻 第4号）

若き日の安吾君 三好 達治
『文學界』 1955（昭和30）年4月号
（第9巻 第4号）

「安吾忌」昭和41年2月22日
朝日新聞 夕刊

坂口さんのこと

井上 靖

坂口さんのことという題をつけたが、私は坂口さんに一度も会っていない。二三次会えば会える機会があったが、その度にいつでも会えるような気持でその機会を逃してしまった。今考えると、ちょっと取り返しのつかない残念な気持である。

私は坂口さんの作品について一度だけ書いたことがある。勿論坂口さん存命中のことである。

讀賣新聞か図書新聞に書いた「信長」の書評である。私は書評の原稿を書くのが苦手なだけに引き受けないが、「信長」の時は二つ返事で引き受けた。作品「信長」を読んで心から感動したばかりの時であったからである。

私は不勉強で坂口さんの作品を初めて読んだのは戦争直後である。まだ大阪で新聞記者をしていた当時で、最初の作品は「女体」で、その次が「墮落論」であった。

その両方共に打たれたが、特に「女体」を読んだ時の感動は忘れない。全く眼を見張らせられる思いであった。戦争直後に読んだ作品の中で、石川淳氏の「焼跡のイエス」と共に最も感銘深いもので、私はこの作品のことを会う人ごとに話して読むことをすすめたものである。「墮落論」の時は、(略) 私はかなり昂奮して、何か力強いものやまたその反対の不安なものを感じたことを覚えている。

私は二十四年の秋自分の作品を初めて発表した。それまでに最も親近なものを感じたのは坂口さんの作品であった。自分の作品は坂口さんの作品とは全く違ったものであるが、何人かの人の創作集がある場合、ふと手をのべ易いのは坂口さんの作品集で、そんな意味で私はやはり作家の本質としては坂口さんに親近なものを持っているのではないかと思っている。

坂口さんの作品には幾多の傑作があるが、私は上述の意味で、「女体」と「墮落論」には特殊なものを感じている。併しこれは私ばかりでなく、私同様なことを感じている人は案外多いのではないかと思う。とまれ、あの時期に、あのような華々しい作品の発表の仕方ができたということでは、やはり坂口さんは幸運な作家ではないかと思っている。

坂口君の「風博士」が発表された頃。

あれはいい作品だから読んでみろと私に教えたのは、そのころ「文藝春秋」を編集していた永井龍男であった。さっそく私は読んだ。それから何日かたって、同人雑誌「作品」の会に出かけると、「風博士」について永井と中村正常が論争のようなことをやっていた。作品の傾向からして、中村君は理解を持つ筈だと思えるのに、永井の云うのに対して複線の汽車のような筆法で反対を云っていた。複線のレールの場合は列車が双方から進行しても衝突しない。互に、さっと通りすぎる。永井君と中村君の論争は、一方が何か云うと、他の一方がそれと衝突はしないが反対の意見を云い、一方がまた何か云うと、他の一方が漠然と反対の意見を出す。では、論争ではなかったのかと云うに、やはり論争のようなものであったから反って印象が深い。

その後、出雲橋のはせ川で坂口君を見かけるようになった。

(略)

二階から下りて行くと、たいてい坂口君と牧野信一が土間で飲んでいて。私の思うに、坂口君は牧野さんの作品に敬意を表していたのではなかったかと思う。また、牧野さんは坂口君に一もく置いていたのではなかったかと思う。そのころ牧野さんは苦心の創意による作品を先駆者のつらさを偲ばせながら書いていた。坂口君は持って生まれた才能で「風博士」その他を書いた。先駆者の方がつらいだろうと、当時の私は二人を見くらべたこともあった。

戦後、新大阪新聞に連載された坂口君の「信長」は、未完だが私は面白く読んだ。信長のことを書いた作品なら私は誰のものでも読みたいが、坂口君の信長は文献に対する独創的な解釈が際立っているので熱心に読んだ。澆刺とした生氣ある信長が書けていたと思う。

「風博士」と「信長」は趣が大いに異っている。これは坂口君の変貌というよりも、双方とも坂口君の持っているほんの一部のものであったと思いたい。いい作家であった。たたずまいというような点でも、得難い作家であったと思う。

(前略)

坂口安吾には、矛盾する二つの精神が共存しているように見えます。「安吾巷談」「新日本地理」などの文明批評的なエッセエに一貫している合理的な精神と、「墮落論」「白痴」などで吐露されているデカダンスへの熱烈なあこがれとがこれです。

「墮落論」は、(略)戦争中の42年(昭和17)に書かれた「日本文化私観」にそのままつながるものです。戦争のまっただ中で主張したことを、そのまま敗戦のまっただ中で訴えつづけたものであって、戦争に負けてるので、世相に応じて「墮落論」を書いたのではけっしてありません。桂離宮に象徴されるような、伝統的な菜食主義ふうの生きかたや美観(戦争中はこの一点ばかりだったことはいうまでもありません)を拒否して、「武蔵野の静かな落日はなくなったが、累々たるバラックの屋根に夕陽が落ち、埃のために晴れた日も曇り、月夜の景観に代ってネオン・サインが光っている」このわれわれの実際の生活に根ざさぬ美などはありませんという「日本文化私観」の叫びは、敗戦の混乱の中で、なお天皇制や家族制度にすがろうとしている人たちに向かったの「生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に真に人間を救い得る便利な近道がありうるだろうか」という呼びかけに、まっすぐにつながっているのです。これらのエッセエで、坂口の説いている根本には、きわめて合理的で闊達な批判精神が働いているのであって、これが非合理的な障害にぶつかければ、それだけ、「生きよ墮ちよ」というデカダンスへの呼びかけも高まらざるをえないのです。矛盾するかと見える二つの精神が、じつは一つのもの両面なのです。

この作家が、伊東の競輪について問題をおこしたり、税務署を相手に渡りあったり、そのほか酒の上でのあれこれが、いろいろ伝えられているようですが、すべてそれらは彼の文学とは本質的には関係がありません。坂口の文学は、東洋風の沈鬱孤独な精神主義的なものです。

文芸家協会会長の青野季吉の弔辞の中で、「坂口君の文学は、一言でこれをつくせば、大いなる偶像破壊の文学、執拗な怒りの文学ということが出来ましょう。しかもその底に人間の赤裸々な真実への愛情をふかぶかとたたえていることで、まことにユニークなものでありました。」と述べています。多面的な活動を示したが、すぐれた作としては、前記諸作のほかに、短篇「夜長姫と耳男」、長編「信長」などが知られています。

井上 靖 いのうえ・やすし 1907 明治 40 年—1991 平成 3 年 84 歳

北海道上川郡旭川町（現：旭川市）に生まれる。

井上家は静岡県伊豆湯ヶ島で代々続く医家。

第四高等学校理科時代より文学活動、井上泰のペンネームで詩の投稿（1930 年）し、詩作をはじめめる。1936 年京都帝国大学文学部哲学科（美学）卒業。サンデー毎日の懸賞小説で入選し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社、学芸部へ配属。

戦後は学芸部副部長をつとめ、囲碁の本因坊戦、将棋の名人戦の運営にも係わる。

1950 年「闘牛」で芥川賞受賞。51 年毎日新聞社を退社。以後、創作の執筆と、取材旅行を続けた。また 10 代から始めた詩作を、83 歳で亡くなるまで続けた詩人でもある。日本文学に物語性を回復させ、昭和文学の方向性を大きく転換させた作家の一人。

1960 年代以降、ソ連、中央アジア、中東の秘境まで諸国各地を何度も旅をし、西域の歴史小説や紀行文、各地の美術評論なども著す。また、日本の高度成長や科学偏重主義などを憂う小説や、老いや死生観を主題とした心理小説、自分の境遇を基にした自伝的小説など幅広い作品を発表した。代表作：「しろばんば」「氷壁」「天平の薨」「敦煌」等

1980 年、日中文化交流会会長、81 年日本ペンクラブ会長に就任、国内外で積極的な文化活動を行う。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章受章（1976 年）。

井伏 鱒二 いぶせ・ますじ 1898 明治 31 年—1993 平成 5 年 95 歳

広島県安那郡加茂村（現：福山市）に生まれる。本名：井伏満壽二 筆名は釣り好きによる。文化勲章受章（1966 年）

井伏家は室町時代まで遡れる旧家で、代々の地主。福山中学校に進学。画家を志すが、橋本関雪に入門を断られて、文学に転向。1919 年早稲田大学文学部仏文科に入学。1923 年同人誌『世紀』に参加し、「幽閉」を発表、のちに佐藤春夫に師事。

29 年「幽閉」を改作し、「山椒魚」を『文芸都市』に発表。30 年『作品』の同人となる。38 年『ジョン萬次郎漂流記』で第 6 回直木賞受賞。『文学界』の同人となる。昭和初年から山梨県を頻繁に訪れ、地元の多くの文人と交流し、趣味の釣りを楽しみ、山梨を舞台にした作品も多く残す。49 年 4 月から 50 年 5 月「本日休診」を『別冊文藝春秋』に連載。65 年 1 月から 66 年 9 月『新潮』に「黒い雨」を連載。この作品で 66 年野間文芸賞受賞。

菊池寛の影響で、将棋に夢中となり、日本将棋連盟からアマ五段の認定書をうける。将棋の好敵手は、永井龍男だった。太宰治は、井伏を師と仰いでいた。

釣り、旅行、書画、焼き物など多趣味でしられる。

江口 清 えぐち・きよし 1909 明治 42 年 - 1982 昭和 57 年 73 歳

フランス文学翻訳家。小説家。東京・神田に生まれる。アテネ・フランセ高等科卒業。

アテネ・フランセで安吾と出会い、親しくなる。長島萃と3人でデュアメルデュアメルの「深夜の告白」の読書会をしたりした。

アテネ・フランセの友人らとつくった『言葉』、その後継誌『青い馬』の同人でもある。『青い馬』第3号からは本多信とともに編集主幹となり、編集所も神田岩本町の江口宅となった。

ほぼ毎号に、ラディゲやポオル・モオランなどの翻訳を載せ、『青い馬』第3号、4号には小説も書いた。

翻訳家として『定本ラディゲ全集』『メルメ全集』など、多くのフランス文学の翻訳書を出した。レイモン・ラディゲ研究の第一人者で、調布学園短期大学教授、早稲田大学講師をつとめた。

生涯にわたって、100冊以上の翻訳、小説、エッセイ、比較文学、フランス文学の著書を著している。

大井 広介 おおい・ひろすけ 1912 大正元年 - 1976 昭和 51 年 64 歳

本名：麻生賀一郎 福岡県出身 旧制嘉穂中学校卒業 文芸評論家・野球評論家 早くに父を亡くしたため、伯父の庇護を受ける。麻生セメント創業者麻生太賀吉（麻生太郎の父）は、従兄弟にあたる。

1930年東京に出る。39年同人誌『槐えんじゅ』を創刊、40年誌名を『現代文学』と改め、同人制をとる。40年大晦日、坂口安吾と浅草で初めて会い、同人に誘う。平野謙、杉山秀樹、佐々木基一、南川潤、宮内寒弥、荒正人、井上友一郎、郡山千冬らが名を連ねた。戦時中の制約の多い中、良質な文芸誌を出し続けた。安吾を含め、多くの作家にとって『現代文学』は貴重な発表の場であった。

安吾は月10日ほどを大井宅で過ごし、書庫にあった探偵小説などを片っ端から読み、戦時中同人らと推理小説の犯人当てクイズやトランプなどに興じた。

『現代文学』には、「大井広介という男」1942年8月号を寄稿するなど、安吾は1944年1月の終刊まで、「文学のふるさと」「日本文化私観」「二十一」「黒田如水」など毎号のように作品を発表。戦後も安吾との交流は深く、51年9月東京国税局との仲裁をし、10月競輪事件で絶交することになるが、生涯を通じて安吾と安吾文学の一番の理解者であったと自認していた。安吾の元には、大井からの多くの書簡が残されている。

臼井 吉見 うすい・よしみ 1905 明治 38 年 —1987 昭和 62 年 82 歳

長野県南安曇野軍三田村（現・安曇野市）生まれ。小説家、編集者、評論家。旧制松本中学、旧制松本高校文科甲類を経て、1929年東京帝国大学文学部卒業。旧制伊那中学、松本女子師範学校、東京女子大学で教鞭を執る。また1946年創刊総合雑誌『展望』の編集長をつとめ、文芸評論家として活躍。『日本文学全集』『現代教養全集』などを編集。筑摩書房初の大型総合全集『現代日本文学全集』全97巻別巻2（1953～59年）を手がけるなど編集者としての手腕を発揮した。

1956年『近代文学論争』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。64年から代表作「安曇野」の執筆を始め、74年完結。この作品で谷崎潤一郎賞を受賞。75年日本芸術院賞受賞。

『戦後十年名作選集』6（1955年 光文社）を編纂し、坂口安吾「白痴」を収録。同集には他に、石川淳「黄金伝説」、中島重治「おどる男」、梅崎春生「桜島」、佐多稲子「黄色い煙」、高見順「あるリベラリスト」が収められている。

川 村 湊 かわむら・みなと 1951 昭和 26 年 —

文芸評論家。北海道網走市生まれ。1974年法政大学法学部政治学科卒業。株式会社大中入社。78年水産社入社。大学在学中に柄谷行人の教えを受ける。「異様（ことよう）なるものをめぐって—徒然草論」が群像新人文学賞の優秀作に選ばれ、文芸評論家としての活動を始める。82年韓国・東亜大学校文科大学日本文学科専任講師、85年同助教授。90年法政大学第一教養部助教授、94年同教授、99年法政大学国際文化部教授。国際学部長。2017年退任し、名誉教授。

1999年湾岸戦争への自衛隊派遣に反対し、柄谷行人、中上健次、津島佑子らとともに「湾岸戦争に反対する文学者声明」を発表。93年～2010年3月まで17年間にわたり、毎日新聞文芸時評を連載。平野謙の13年間の記録を破る。

坂口安吾に関して『安吾日本史』1988年 東洋書院 をはじめ、講談社文芸文庫等で安吾作品の解説や評論を数多く手がけている。

獅子文六 しし・ぶんろく 1893 明治 26 年－1969 昭和 44 年 76 歳

横浜市生まれ。本名：岩田豊雄。演劇の分野では本名で活動。

横浜市老松小学校から慶応義塾幼稚舎に編入学、慶應義塾普通部を経て、慶應義塾大学理財科予科に進学、のち中退。

1922 年渡仏、フランス現代劇の観劇、研究に没頭。25 年帰国。フランス滞在時の見聞を題材に随筆や短編小説を雑誌に掲載。32 年新劇の団体「築地座」に岸田国土、久保田万太郎、里見敦らとともに顧問として係わる。この頃“獅子文六”の筆名で小説家として活動。36 年報知新聞に最初の連載小説として発表した「悦ちゃん」が大好評で、小説家として名が知られるようになる。37 年岸田国土、久保田万太郎とともに「文学座」を創立。長く精神的支柱として座員らの信頼を得ていた。戦後「てんやわんや」「自由学校」「娘と私」などで人気を博した。

63 年日本芸術院賞、69 年文化勲章受賞し、文化功労者となる。

「ゴルフをしなさい安吾さんや」と勧め、自身の弟彦二郎氏からゴルフ道具を送らせた。その際「最初はプロについて正しいフォームを身につけなければならない」という守るべき一箇条を示し、安吾はそれに従って桐生・書上邸で、プロから手ほどきを受けた。

安吾亡き後、三千代が銀座に開いた店「クラクラ」は、獅子文六の命名による。

田村 泰次郎 たむら・たいじろう 1911 明治 44 年－1983 昭和 58 年 72 歳

三重県四日市市生まれ。1929 年第二早稲田高等学院入学。30 年同級生河田誠一、大島博光ほか、秋田滋、寺河俊雄らと『東京派』創刊。同誌に書いた「意識の流れ統整論」などが認められ、『三田文学』『詩と詩論』から評論を依頼される。31 年早稲田大学仏文科入学。ジェームズ・ジョイスに傾倒した。

33 年 5 月、坂口安吾、井上友一郎、河田誠一、矢田津世子、真杉静枝らと商業雑誌『桜』創刊、長篇「おろち」を連載する。

34 年『新潮』4 月号への原稿依頼があり、短篇「選手」を書き、これがメジャーデビューとなった。40 年夭折した河田誠一の詩集を編纂するが、同年 4 月応召となり、中国大陸を転戦。後を井上友一郎、草野心平に託す。9 月『河田誠一詩集』刊行。

戦後、『群像』に「肉体の門」を発表、単行本化されると、120 万部を超えるベストセラーとなり、舞台化、映画化もされた。戦争中の体験に基づく、独特な生命観に裏打ちされた作風で、「肉体派作家」として熱烈に支持された。

美術収集家でもあり、美術評論家連盟に所属。中国戦線時代（1940～46 年）より洲之内徹と親交があり、田村自身が経営していた画廊のあとを洲之内に託している。

檀 一 雄 だん・かずお 1912 明治 45 年 - 1976 昭和 51 年 64 歳

山梨県に生まれる。本籍地は福岡県。父は凶案技師として各地に赴任、任地を転々とする。1932 年東京帝国大学経済学部入学、33 年同人誌『新人』をつくり、「或家の断層」を発表し、文壇で認められる。34 年季刊雑誌『鶴』、『青い花』を創刊。尾崎一雄、太宰治、中村地平、中原中也、森敦らと知り合い、太宰の才能に強く惹かれる。この頃、銀座出雲橋の「はせ川」で、井伏鱒二に坂口安吾を紹介される。36 年「夕張湖亭塾景観」が第 2 回芥川賞候補となる。同年 3 月東京帝国大学を卒業。8 月より 3 ヶ月大連、奉天、長春などを放浪。39 年『現代文学』に参加。43 年少年航空兵の取材で新潟を訪れ、帰省中の安吾と会う。46 年郷里にいた檀のもとに、佐藤春夫、川端康成、尾崎一雄から手紙が来て、小説執筆を決意。47 年九州から上京、安吾の歓待を受け、東京・石神井に居を構える。アドルム中毒で鬱病を発し、暴れる安吾の面倒を看、49 年安吾が東大病院退院後、療養のため伊東に移ると、尾崎士郎とともに安吾を支えた。51 年「長恨歌」「真説石川五衛門」の 2 作にて直木賞受賞。10 月競輪事件で被害妄想に陥った安吾を石神井の自宅に匿う。

55 年安吾没後すぐに『坂口安吾選集』の編集に携わり、57 年尾崎士郎とともに安吾碑建立発起人として尽力、また長く安吾忌の幹事をつとめた。

三好 達治 みよし・たつじ 1900 明治 33 年 - 1964 昭和 39 年 64 歳

大阪市生まれ。詩人。

1925 年東京帝国大学仏文科入学。同級生に小林秀雄、中島健蔵、今日出海がいる。26 年梶井基次郎らが前年に創刊した『青空』の同人となり、詩を発表する。27 年伊豆湯ヶ島に療養中であった梶井を見舞い、萩原朔太郎、宇野千代、川端康成らと知り合う。

朔太郎の紹介で大森駒込に転居。28 年東京帝国大学卒業。

29 年ボードレールの散文詩集『巴里の憂鬱』を翻訳刊行。30 年 12 月初めての詩集『測量船』を刊行し、高い評価を得る。安吾もこれを愛読している。同年、堀辰雄、小林秀雄、井伏鱒二らの『作品』の同人となる。31 年牧野信一主宰の『文科』創刊に加わり、安吾と知り合う。34 年堀辰雄、丸山薫らと、詩誌『四季』を創刊、編集にも携わる。

38 年野上彰主宰による「文人囲碁会」に参加、その年の秋には安吾も参加する。11 月宇野千代のスタイル社から『文体』を創刊、編集主幹となる。同じく編集に当たった北原武夫とともに、安吾に古典に取材した短篇を依頼し、「閑山」「紫大納言」など新機軸の作品が発表された。39 年小田原に転居、翌年取手にいた安吾を呼び寄せ、毎朝食事にくる安吾と碁を打ったり、キリシタン関連資料を勧めたりした。

詩集『艸千里』39 年、『駱駝の瘤にまたがって』52 年、詩論集『萩原朔太郎』63 年。

頼尊 清隆 よりたか・きよたか 1915 大正 4 年 — 1994 平成 6 年 79 歳

大阪生まれ。三高から東京帝国大学ドイツ文学科に進み、同大学院卒業。東京大学囲碁部主将をつとめ、本郷 3 丁目の碁会所「富岡」の常連で、碁の強さは有名であった。

1938 年 8 月頃、岡田東魚に連れられ「富岡」に来た安吾と知り合う。

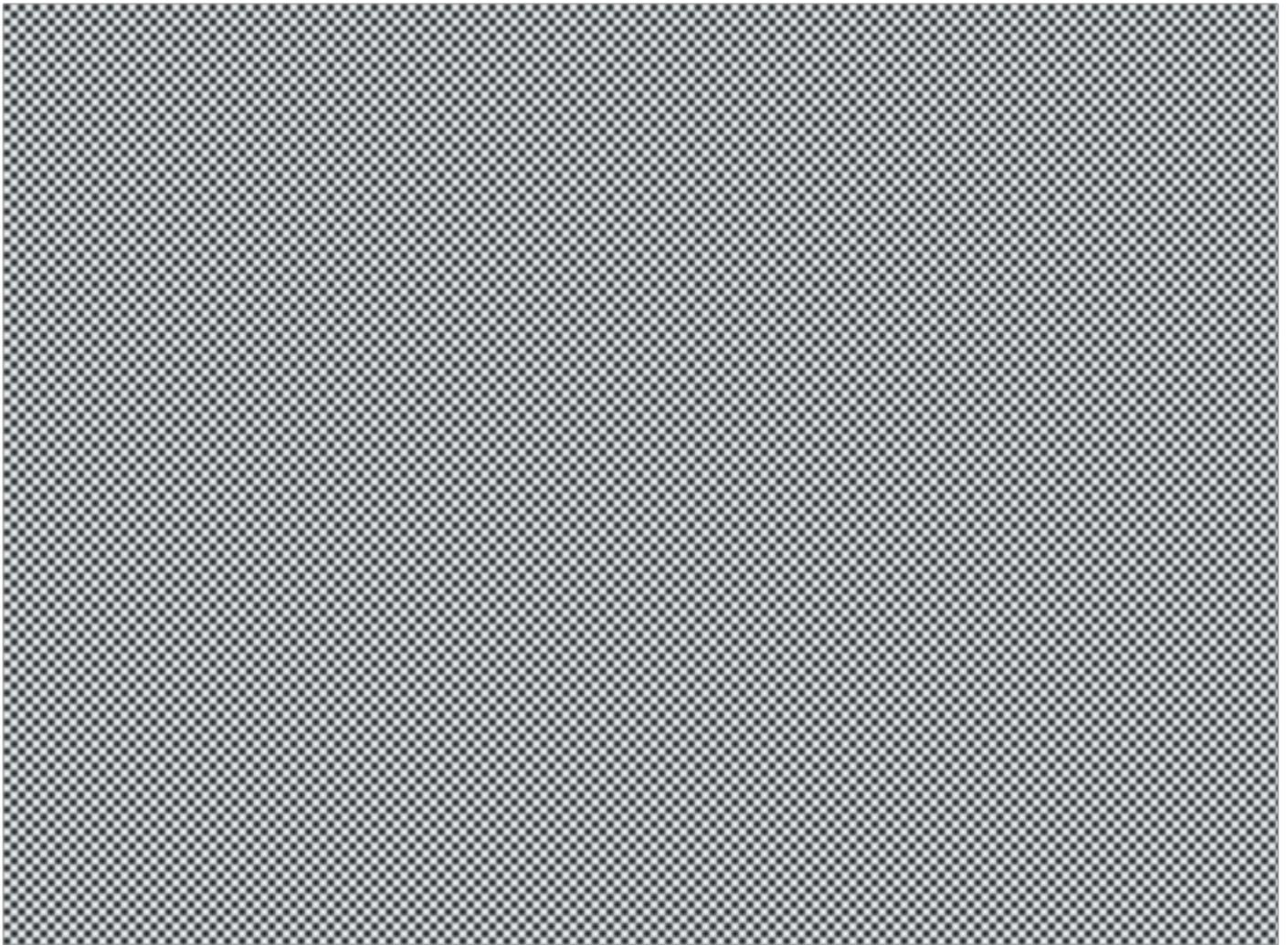
39 年文人囲碁会で、安吾らとともに本郷チームを結成、尾崎一雄ら上野チームと対戦して圧勝した。

1940（昭和 15）年、都新聞に入社、文化部に配属。同紙が東京新聞になってからも文壇・文芸を担当。文化部副部長、文芸専門職部長を経て、71（昭和 46）年退職。

名物記者で、退職後も、東京新聞編集部文化部に勤め、文壇の生き字引として人生を送った。

著書に、『ある文芸記者の回想』1981 年 など。

安吾とは、文人囲碁会で知り合い、都新聞（東京新聞）入社後は、編集者と作家としてつきあい、主に戦前、安吾は「文芸時評」など多くの評論を紙上に掲載した。



河内 翼 かわち・たつみ 1913 大正2年 - 2000 平成12年 87歳

岩船郡関川村女川生。旧制新発田中学から早稲田大学へ進む。新潟日報社に勤務。役員を経て社友となる。安吾の兄・献吉同様、短歌を楽しみ、新潟短歌会に所属。

1957年坂口安吾詩碑建立の際、東京支社にいた河内は坂口献吉に頼まれ、発起人の尾崎士郎、檀一雄との間や、妻三千代との連絡役を担っていた。

檀一雄（1912-1976）は献吉を兄と慕い、安吾没後もしばしば新潟を訪れている。新潟に着くと、必ずその足で寄居浜近くの安吾詩碑へ赴いたという。河内は、新潟での檀や檀の家族をもてなし、檀は新潟で多くの人と交流した。

黒川村（現：胎内市）、新津市（現：新潟市秋葉区）などで、檀一雄の文化講演が行われ、絵や俳句が得意だった檀の作品が、数多く地元に残されている。

1980年5月、黒川村樽ヶ橋公園に檀一雄の文学碑が建立された時には、よそ子夫人ら家族によって除幕式が執り行われた（現在、ロイヤル胎内パークホテル前に移設されている）。河内は、文学碑の発起人の一人として建立に尽力し、新潟日報には建立の経緯などの記事を寄せている。



「決戦川中島」取材にて 檀一雄と
1953年

西都原遺跡にて埴輪を見る
1954年12月







【和室 坂口綱男写真展示】

「 安吾のいる風景 」 Photo/Essay

1982年4月～7月、1996年7月～10月 『新潟日報』（計30回）、
1996年6月～8月 『桐生タイムス』（計10回）より、10作品を展示

参考文献

坂口安吾選集 檀一雄編 東京創元社 1955、56年

檀一雄 各巻解説、月報2 井伏鱒二、月報3 井上靖

戦後十年名作選集 6 臼井吉見編 光文社 1955年

定本坂口安吾全集 第7巻 作家論 檀一雄 冬樹社 1968年

坂口安吾研究 1 関井光男他著 冬樹社 1972年

坂口安吾全集 月報1 川村湊 筑摩書房 1998年

坂口安吾全集 5 「二十七歳」 筑摩書房 1998年

坂口安吾全集 1 2 「風流」 筑摩書房 1999年

趣味の文具箱 10 株式会社ヘリテージ 2023年